

京都大学大学院人間・環境学研究科
共生人間学専攻外国語教育論講座

西山教行研究室へようこそ

言語政策, 言語教育学, フランス語教育学への誘い

2018

研究テーマ

- 本研究室では、歴史、社会、文化など人間を取り巻くさまざまな環境のなかで外国語教育の様態を検討し、外国語教育は何をめざすのか、社会でどのような役割を担うのか、どのような制度のもとで実践されるのかななどを考察します。
- このため、社会のなかで言語にどのような地位と役割を与えるのかを批判的に検討する言語政策の方法論を参照し、学校という社会における言語のあり方に迫ります。

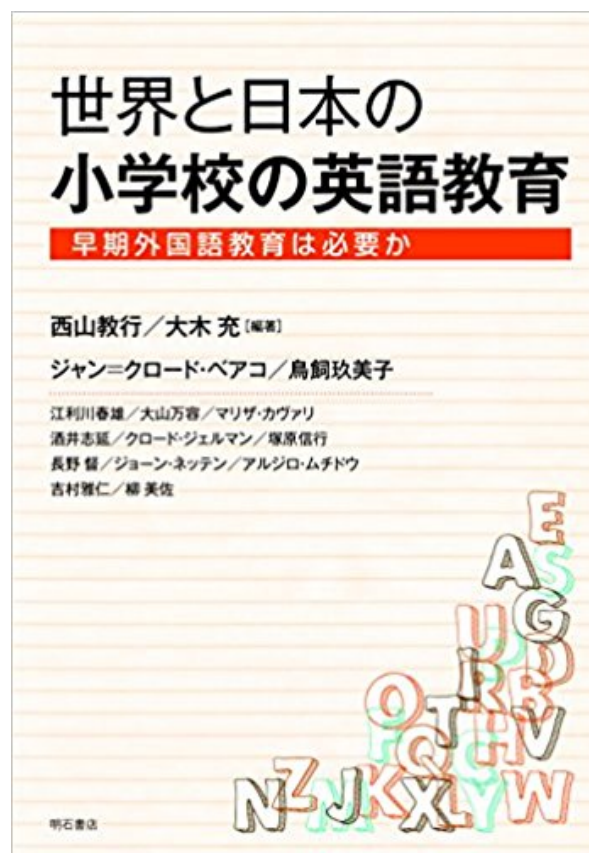


最近の研究成果より

- 『ことばを教える・ことばを学ぶー複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)と言語教育』 (2018)
- アントワーヌ・メイエ『ヨーロッパの言語』 西山教行訳, 岩波文庫 (2017)
- 『世界と日本の小学校の英語教育 –早期外国語教育は必要か』 編著 (西山教行, 大木充) (2015)
- 『異文化間教育とは何か –グローバル人材育成のために』 編著 (西山教行, 細川英雄, 大木充 編) (2015)
- 『「グローバル人材」再考 - 言語と教育から日本の国際化を考える』 (2014)
- 『マルチ言語宣言-なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』 (2011)



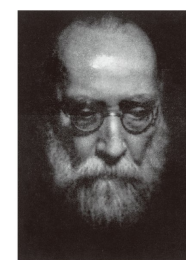
最近の研究成果より



ヨーロッパの言語

アントワース・メイエ 著

西山教行 訳



比較言語学の巨人が、言語の統一と分化に関わる要因を、文明、社会、歴史との緊密な関係において考察。大言語から少数民族の俚言まで数多の言語がせめぎ合うヨーロッパの言語史を先史時代から第一次世界大戦直後まで射程に収め、国家や民族との関係、話者の社会階層や地位に着目して分析した、社会言語学の先駆的著作。

ヨーロッパの言語史を先史時代から第一次世界大戦直後まで射程に収め、国家や民族との関係、話者の社会階層や地位に着目して分析した、社会言語学の先駆的著作。



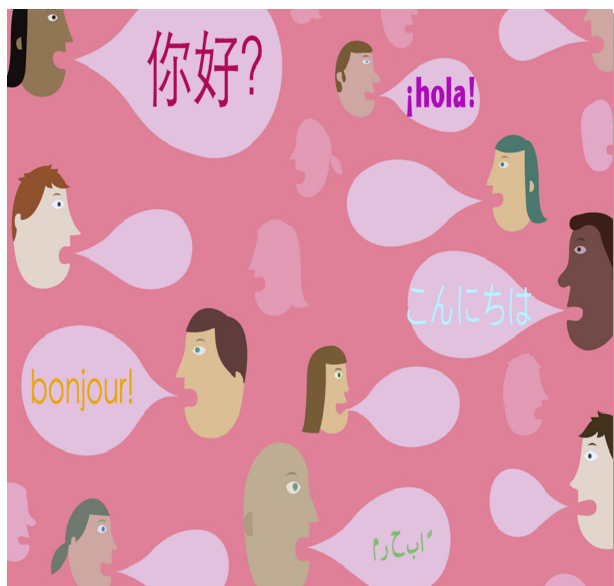
青 699-1
岩波文庫

研究室メンバー紹介



- PD : 大山万容, 許 之威, 程 遠巍, 赤桐 敦
- 博士課程 : 濱嶋 聡, 下 絵津子, 倉舘 健一, 西島順子, 喬 天源, 佐藤美奈子
- 修士課程 : 関Delphine 笑子, 朴 燕, 馬云霏, 藤井 碧, 引田美沙, 張 心悦, 金 ダソム
- 研究生 : 張 尋, 邵韵彤 (ショウ イン トウ)

言語への目覚め活動



- 博士論文では、複言語主義に基づく教授法の一つである「言語への目覚め活動」について、複数の言語を同時に使って学ぶ方法と実践について研究しました。現在も教材開発を続けています。
- これに関連して、移民のための言語支援（例えば日本における日本語教育）や、言語教育の脱植民地化（例えば台湾における日本語教育）、また大学の外国語教育についても研究しています。
- 大山万容（おおやま まよ）PD

言語には文化が反映されている



- 言語は単にコミュニケーションの道具だけではありません。異言語を習得すれば、それを使う人々の考え方や、自分の国と異なる文化を理解し、「寛容」の態度で接することができます。このようなヨーロッパで生まれた教育思想は、東アジアの国々にも活用できると考えています。
- 博士論文では、『ヨーロッパ言語共通参照枠』(CEFR)の中国と台湾における受容の実態について研究しました。その後、大学の中国語教育におけるポートフォリオの導入について研究しています。

程 遠巍(CHENG, Yuanwei) PD

漢字圏における言語教育政策

私たち日本人は普段、ひらがな、カタカナ、漢字という、大変複雑な書記言語を、無意識に使用しています。

また、漢字の祖国、中国では、簡体字という省略した漢字を使用しており、お隣の韓国では、漢字をやめて、ハングルだけを使用しています。



8

昔は、同じ漢字圏だった国々が、なぜこのように異なる現代語を作り上げたのでしょうか。

私は、これを解くカギが、19世紀の言語教育政策にあると考え、教科書に使用された文字と、教科書を作った人々の言語教育観を研究しています。

博士課程単位取得満期退学 赤桐敦（あかぎり あつし）

死滅アボリジニ言語復興プロジェクトとその学習意義

- 濱嶋聡（はましま さとし）

- 後期博士課程 3年



- 研究テーマ：ヨーロッパ（イギリス）人がオーストラリア大陸への入植を開始する以前までは、ドイツ語とフランス語間の相違と同じ程度の違いのアボリジニ諸語が約250語存在していました（Macquarie大学言語研究所による）が、現在では50以下に減少し、毎年1言語が消滅していく状況にあります。現在、オーストラリアではそのような死滅言語を例えば、宣教師が記録した資料をもとに復活させて先住民のアイデンティティ維持に活かすプロジェクトが各地で行われていますが、その学習の意義と、政策と現状のギャップを埋めるためにどのような試みがなされているのかについて現地調査をもとに研究を続けています。

近代日本の学校制度における英語以外の外国語教育政策史

- 英語偏重と批判される現在の日本の外国語教育。その基礎となった明治期から戦前にかけての学校制度における外国語教育。特に英語以外の外国語教育の実情はいかなるものか。



次の視点から研究しています。

- 「英語偏重」と言われる外国語教育がどのようにして起こったのか。
- 外国語教育に関する政策決定の過程で、英語偏重に対抗する議論はこれまでにどのようなものがあったのか。
- それは、外国語教育政策決定にどのような影響を与えたのか。

- 博士後期課程3年 下 絵津子（しも えつこ）

1970年代のイタリアにおける 民主的言語教育の複言語教育



11

- 近年、排外的傾向にある欧州ですが、言語政策では多様性を認める寛容な社会を目指し、複言語・複文化主義の具現化に向けての取り組みが進められています。
- しかし、このように言語を通してよりよい社会を目指すという動きは今に始まったことではありません。その一つが1970年代にイタリアで提起された「民主的言語教育」です。それは、当時、多言語社会にあったイタリアにおいて、言語格差による生徒の不平等をなくすための言語教育改革でした。
- この民主的言語教育が内包するとされる複言語主義を明らかにし、現在の複言語主義との比較・考察を行うことで、現代の多言語・多文化社会への示唆を得たいと考えています。

よりこ

博士課程：西島順子

語学の戦後史とラジオ第二放送―― 英語以外の語学講座番組の変遷と語学習得の大衆化過程



12

- 日本では語学をラジオで学ぶ伝統が受け継がれてきました。ラジオ語学講座は、学校教育とともに長らく外国語と異文化の学習文化の中核を成してきた、世界的にも貴重な教育文化遺産ではないでしょうか。
- 公共性の高さ、ラジオのアクセシビリティ、聴取可能範囲の広さ、放送頻度の高さ、地域言語講座の貴重性、またテレビとは違う学習内容の濃さなどを特徴としており、学校教育とは異なる重要な語学学習メディアとして認知され、現在に至っています。
- ラジオ語学講座は先の大戦を前後して開始されました。英語以外の語学教育の戦後史についての研究が手つかずの状況のなか、放送資料からこれを辿ることを構想しています。
- 講座開始の社会的政治的背景、またいわゆる「学校放送」とは別の発展を遂げてきたこれらの番組が環境として提供する学習のオートノミーとその社会的変容の過程などを浮き彫りにしたいと思います。

博士課程：倉 舘 健 一

中国の外国語教育における異文化間コミュニケーション能力の育成

- 「異文化コミュニケーション能力の育成」は2000年から、中国の大学専攻英語教育と日本語教育に教育原則や目標として取り扱われ始めた。さらに、異文化コミュニケーション能力の育成を目指す教科書と科目も次々と開発され、上海外国語大学をはじめ、多数の大学において、「異文化間コミュニケーション学」が独立の大学院コースとして英語言語学の下に設置されるようになってきた。



13

- しかしながら、関連教科書と科目の内容からみれば、異文化間コミュニケーションの取り扱われ方が不明確で、外国事情、文化の差異など固定的な「知識」の紹介に重点が置かれ、異文化間コミュニケーション能力の育成にどのように機能しているのかはまだ十分に議論されていなく、実践内容と育成目標と一致しているとは言い難い。
- 中国の大学専攻英語教育と日本語教育において、異文化間コミュニケーション能力の育成に関する理論展開や実践状況を考察し、アメリカやヨーロッパで議論された異文化間コミュニケーション能力との比較を行ない、これからの中国外国語教育における異文化コミュニケーション能力の育成方向を把握することを研究目的とする。

博士後期課程1年：喬 天源（キョウ テンゲン）

ブータン王国の言語生活と言語認識

ヒマラヤの小さな王国，ブータン王国の言語生活と言語認識の研究をフィールドワークをもとにおこなっています。



14

- ブータンは，日本の四国ほどの大きさの国に，新たに国語となったゾンカ語と教授言語である英語，そのほか19の小さな少数民族言語が林立している多言語国家です．そのほか，隣国のインドやネパールの言語も加わり，3つ，4つの言語を自由に織り交ぜて話す人も珍しくありません．
- もっぱら関心は，人びとがどのような機序で言語を使い分け，使い分けることで何を伝えようとしているのか，という問題です．多言語社会の多言語話者が，自身の多数の言語のなかでどの言語を母語と認識するのか，多言語話者にとって母語を定義し，認識することはどのような意味があるのかと考えていきたいと思っています．
- **博士後期課程 1年 佐藤 美奈子**

中国における留学教育の 現状及びその発展について



15

- グローバル化が進むにつれ、高等教育も国際化を迎えつつあり、高等教育の一環である留学教育も優秀な人材獲得時代を迎えています。
- 中国の各大学も留学生政策の下で、「留学生質的成長と管理」を重要視する傾向が見られています。
- ここで、中国の留学教育における諸問題を日本、韓国の留学教育との比較を通じ、問題点、共通点・相違点などを明らかにしていきたいです。

M3 朴燕 (ぼくえん)

フランスにおけるの「学習者の自律」ーフランスCRAPELの一例ー



16

- 近年、教育において、学習者の自律は大きく叫ばれていることの1つです。外国語教育においても、それは例外ではありません。
- 学習者の自律化を独自の視点で研究したフランスの研究チームCRAPELの自律型外国語学習は学習者の自律の1つの有り様を示しています。
- フランスでこのCRAPELの考えが生まれた社会的教育的背景を研究しています。

フランス語の教育的イデオロギー



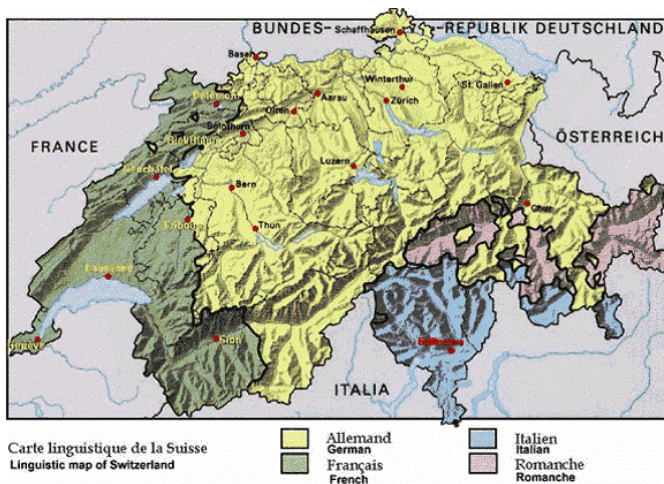
17

- フランスでは外国語としてのフランス語（FLE）教育に力を入れており、国外に話者を増やそうとしています。しかしFLEの起源になったのは、植民地で行われていた主要な政策の一つでした。従って、共和国の理念を現地の人々に押し付けるものでした。
- フランス語教育が植民地政策からFLEへ方針を転換する間に、そのイデオロギーはどう変化したのでしょうか。アフリカ諸国の独立後、70年代の外国人向け教材を分析し、何が教えられているかを考察します。

修士2年 引田 美沙

多言語国家スイスの言語政策

- 日本では「いかに効率よく、英語を学ぶか」に関心が集中している一方、欧州では「なぜ学校で外国語が必要か?」「なぜ英語か?」という、深い問いかけがあることに関心をもち、社会言語学の勉強を始めました。
- 特に、一国の中に欧州の大言語が集まり、外国人の比率も高いスイスを研究対象に選びました。なぜスイスでは、学者だけでなく、政治家や一般大衆も、言語について白熱した議論を交わすのか、その背景と議論の経緯を調べています。
- 日本人の両親、日本の学校、日本語の授業という環境で育った私から見た「言語」の輪郭は、スイス人のそれと異なるでしょう。スイス人に限らず、私の隣で研究している友人もきっと、全く異なる視点で「言語」を捉えているのではないかと考えています。



修士課程2年 藤井碧 (FUJII AO)

中国と日本の大学の学ぶ外国語選択の動機と要因に関する考察



19

- 近年グローバル化の発展に伴い、大学において、英語以外の外国語を履修する学習者がますます増えてきました。英語の普及は、「仕事のため」という理由で位置づけられることが多い。
- 英語以外の学ぶ外国語の選択は、「文化」、「趣味」、「政治」などの要素が見られました。学習者はどのような動機と要因の影響で学ぶ外国語を選択するか、それは外国語教育の動機づけ、学習ストラテジー及び教育方法と直接的に関係します。
- 学習者の学ぶ外国語を選択する時、どのような動機とその選択に影響するか、また中国と日本の差異の原因を考察していきたい。
- 馬 云霏 M2

「共生言語としての日本語」



20

- 日本内で住む日本語非母語話者が増えるにつれ、「やさしい日本語」での情報提供など、彼らが日本で安心して暮らせるための努力も増えつつあります。また、非母語話者と母語話者が共に生きることを前提とし、お互いのより円滑なコミュニケーションを図るためには、「共生言語としての日本語」が必要であるという意識も生まれました。
- このように日本は、多言語社会へとなりつつありますが、今でも日本社会の公用語・共通語としてもっとも広く使われているのは日本語であります。
- そこで私は、非母語話者に対する日本語教育政策を考察し、日本語が本当の意味での「共生言語」となるために必要なものは何かについて考えていきたいと思えます。



少数民族地域における複数言語教育・政策に関する考察

- 多民族国家である中国では、1950年代に国家統合を念頭においた漢語普及と少数民族言語・文化の尊重とを両立させる政策として「双語教育」が提唱され、1990年代に英語支配の現実に対応しようとするために、英語教育が必修となり、全国の少数民族地区で多言語教育を実施するようになっていく
- 日本は単一民族国家であり、言語も日本語しか話さないと信じる人々はまだまだ全世界に多いかもしれない。しかし、実際には、アイヌ民族、琉球民族を始め、中国帰国者、韓国人、ブラジル人、東南アジアや欧米人など、日本は規模は小さいかもしれないが、多民族国家、多言語国家と言っても良いような状況になりつつある。
- 修士2年間、復言語・文化主義の視点から日中少数民族言語教育の展開を考察することによって、マクロレベルの言語教育政策からミクロレベルの課題、例えば教員養成、カリキュラムの編成やエスニック文化の継承の問題にも着目する。日中少数民族教育に関してわずか二つの例に過ぎないが、復言語・複文化主義の発展に寄与するための手がかりになるのではないかと考える。



21



M1 張 嬌嬌

日本社会は外国人に対して どれほど開かれているのか



22

- グローバル社会の進展に伴い、日本で生活している在日外国人数が増えているため、いかに外国人を日本文化に適応させるのか、どのように適応を支援するのかについての異文化理解の研究が大量に蓄積されてきた。
- しかし、受け入れ側として、日本人・日本社会がどれだけ異文化に対して開かれた態度を取っているのかに関する研究がまだ少ない。
- 異なる「集団」、「国」ではなく、ともに集団・社会を形成する「個人」として、相手とどのように向き合うのか（福島, 2014）という新しい視点で研究したい。

外国語教育における 「異文化」の境界線の取り扱い



23

- 修士論文では、中国人日本語専攻大学生を対象に、「異文化感受性」（異なる文化に対する考え方、認識の仕方）について研究を行ってきました。
- その結果から、日本語教育だけではなく、いままで受けてきた教育全体が、日本語学習者の異文化への認識に影響を与え、それに、学習者が「異文化」の境界線に対する考え方も、それぞれ違ってくることがわかりました。
- それに踏まえて、英語教育を含めむ外国語教育では、「文化」の境界線がどのように取り扱われるについて研究を進めていきます。

研究生 張尋（チョウ ジン）

第二言語習得における自律学習と教師の役割について



24

- 20世紀80年代、中国の日本語教育分野において、「自律学習」という概念が使用し始めます。
- 「自律学習」といえば、多数人は、自律学習とは自分ひとりで学習するというものであり、学習者の自我管理だと考える。しかし、これは正確ですか。
- 日本語を第二言語とする学習者を研究の対象とし、自律学習型の第二言語学習における意味と学習動機づけから教師が援助者として自律学習における役割を研究したいです。

研究生 邵韻彤 (ショウ イントウ)